





源氏流瓶花規範抄

長廊下子花生之事



一、此の清道法候方より表裏後より異向、
圓可嘉廊下落掃枝活多之務也、
花札を新き盤切盤敷、並に花根切の
草花を多種七種位根之枝等、刺打白

重之尤缺を差支の筆枝を以て之を
其ののりまを庄所正し^{シヨチ}由是中と云ふ
るやれ、水十分、張主より古例有る
常時、夫に留りの出入主方作本振る纏
活多きはなれども、全く活を成りしよりなされ
格別、永纏ふ即て悪く、只花を以て持せ
水面より、^{フコ} ^{オロシ}

春田虎^{フコ} ^{オロシ} 花活多事

一、是の釣舟、其曼物を生かす、二、海程曼物を
杉河下、其下、春田を坐て、且、市、^{カク} 款の
花を、其色、^{ハナ} けたる、^{ハナ} 体、^{ハナ} 振、^{ハナ} 活、^{ハナ} 多、^{ハナ} う、^{ハナ} 一、^{ハナ} 玉、^{ハナ} 上、^{ハナ} の、^{ハナ} 仕、^{ハナ} 業
にて、古例、子、休、^{ハナ} 花、^{ハナ} 守、^{ハナ} た、^{ハナ} 同、^{ハナ} 和、^{ハナ} 子、^{ハナ} 四、^{ハナ} 郎
と、^{ハナ} 一、^{ハナ} 時、^{ハナ} 風、^{ハナ} 雅、^{ハナ} 志、^{ハナ} 敦、^{ハナ} 活、^{ハナ} 西、^{ハナ} 通、^{ハナ} 参、^{ハナ}
ら、^{ハナ} 於、^{ハナ} 栢、^{ハナ} 城、^{ハナ} あり、^{ハナ} 鞞、^{ハナ} 馬、^{ハナ} 少、^{ハナ} 一、^{ハナ} 方、^{ハナ} 打、^{ハナ} 取

山打の^{田カノ}有具其^{カマ}事^キを^カん^カる^カて^カ絶^{ゼツ}頂^{トウ}より^カ有^カ
、石を^カた^カけ^カす^カる^カ矢^カ田^カの^カ入^カれ^カ網^カを^カ台^カに^カ
、文^カ山^カの^カ名^カ、^カ深^カお^カけ^カす^カは^カ体^カを^カ見^カて^カ思^カひ^カ
つ^カれ^カ釣^カ舟^カの^カ類^カ、^カ花^カを^カ活^カけ^カそ^カの^カ蔓^カを^カ
の^カ糸^カす^カぢ^カを^カら^カま^カて^カ初^カ金^カ敷^カを^カ耳^カ下^カに^カ
、^カな^カれ^カた^カ、^カ又^カう^カ矢^カ田^カの^カ活^カ方^カ種^カ々^カ風^カ雅^カ
の^カお^カい^カひ^カを^カと^カり^カて^カ古^カ例^カ種^カ々^カ種^カ々^カ種^カ々^カ
の^カお^カい^カひ^カを^カと^カり^カて^カ古^カ例^カ種^カ々^カ種^カ々^カ種^カ々^カ

当^カ境^カの^カ麦^カ草^カ痛^カ草^カの^カ類^カ、^カ矢^カ田^カを^カ編^カ
其^カ内^カに^カ管^カを^カ入^カ釣^カ瓶^カの^カ様^カ、^カ釣^カ舟^カ一^カ方^カを^カ
下^カに^カ垂^カさ^カ其^カ釣^カ繩^カを^カ蔓^カを^カと^カり^カて^カ白^カか^カせ^カり^カ然^カ
と^カ下^カに^カ垂^カさ^カる^カ矢^カ田^カの^カ内^カに^カ花^カの^カ咲^カき^カの^カり^カたる^カ様^カ
と^カ生^カき^カの^カて^カに^カ合^カ上^カの^カ活^カ方^カなり

楊柳活方の事

一、是^カに^カ近^カ賢^カ守^カ中^カの^カ快^カ将^カ軍^カ也

嚴

有^{イカシ}君池の坊を召^{サセ}せられ大書院のほ^ハ護
古^コ法眼^{ハク}の女^メ親^ミ言^{コト}に^カ連^レを^カかけ^セ玉^ヒひ^シ画^ガ
荷^カ有^ルと^モ是^レの^ハ坊^ノ命^ノで^ラれ^且其^ノ池^ノ坊^ノ
柳^ノ一^ニ色^ヲを^サされ^レゆ^とモ^古例^ノ依^リ柳^ノ一^ニ色^ヲ
活^カ可^ク有^ルと^モ之^レと^モ亦^モ華^ノ物^トと^モ色^ヲな^レれ^モ
よ^ク心^ヲあ^らむ^人と^モ之^レに^外に^ハ只^シは^可ら^れ
と^モ若^ク長^ク秋^ノと^モ柳^ノの^糸色^ノ物^ノ様^ノ出^ル

一 勅^{チク}辨^{ベン}を^シん^ズ事^ナら^ズ

祝^{イハヒ}の^ノ枝^ノ法^ノを^シん^ズ

● 祝^{イハヒ}の^ノ枝^ノと^モ子^ノ利^ノ休^ノ宗^ノ易^ノと^モ一^ニ以^テ南^ノ都^ヲ
休^ノの^ノ師^ノ珠^ノ光^ノに^シて^ハ、茶^ノ子^ノの^ノ自^ノ傳^ノ根^ノか^レれ^モ
折^レ朽^レ珠^ノ光^ノに^シて^ハ、天^ノ津^ノの^ノ皇^ノ御^ノ新^ノを^カけ
られ^テ字^ノ易^ノに^シて^ハ、致^スされ^ルと^モ有^ル一^ニ時^ノ折^レ節^ノ
庭^ノ前^ノに^シて^ハ、白^ノ梅^ノに^シて^ハ、花^ノ様^ノと^モ一^ニ時^ノ折^レ節^ノ

けれ梅の樹ツバキニ本々咲けり梅を根
 々、清りられけれ師の珠走感嘆カクして
 数奇のヨシ幸情コトの可過スし 沖波納交ウツ
 も可有コトしとて 茶事チャに侍接珠走シ
 りえり 名譽ナは数奇コトをたれ格別コトに侍接シ
 是より始まりて之師の御前ミ急イなる由ユの
 花をハはなすコトしヤ 此コノ花ハをハはなすコトしヤ 樹ツバキニ本々ニ

何ありしと余の花をハはなすコトしヤ 此コノ花ハをハはなすコトしヤ
 樹ツバキニ本々ニ 此コノ花ハをハはなすコトしヤ 樹ツバキニ本々ニ
 一本ヒトの本ホをハはなすコトしヤ 樹ツバキニ本々ニ
 一生ヒトのシ花ハをハはなすコトしヤ 樹ツバキニ本々ニ

虚瓶ソウ之事ジ

一 此コノ或人ナニ梅ウメのハ花ハをハはなすコトしヤ 樹ツバキニ本々ニ
 此コノ花ハをハはなすコトしヤ 樹ツバキニ本々ニ

前々生かれたり依て空瓶とて是も風程の
清しきものなるをばも殊に清きものあり
きよきとて運^ダ渡しよいに生花に差合ぬ様能
心ふらふりかたなり尚古路の枝の運を
に口申控をぬくことなり

子白の生花

一 是利休茶室の最中に^{オモハシ}行し時侯授まら

竹の中細川^ニさるる^ハわけて^{フウ}風^ガ雅^カあめ^ノ音^ナ
人^ノも^モ或^ハ時^ニ枯^レ木^トなり^テウロ^ク穴^ノの^ハる^ル朽^レ木^トへ^ハ見^エえ^テま^り
様^ノ竹^ノの^ハ目^ヲを^推入^レれ^其れ^ハ意^ヲを^又れ^られ^{たり}
是^ハし^テ仰^ル始^メし^テ観^音を^撫え^枯たる^木
木^も花^さき^とい^ふ心^なれ^ハ分^ると^は流^るり^ん
尤^も生^花に^堪え^ずし^生方^ハは^節と^思ふ^所の^所
より^花の^枝を^出し^礼合^能自^然と^ばく^にま^り

たる様流るなり

油差花生る花活方此事

一 階を太き竹の節を西端ニシヤより一寸切
しその花をこしおまぶらぬをこしおまぶらぬ
後、同様蔓をめぐり左の方に一回一筋
中大作釣母の如く釣るものあり花は
何れも流るなりと云ふ一途なり

一 花を西端より生る釣をわけて見る様流るなり

連理の枝活方の事

一 大花一輪流る柳の連理の枝をわけて
こ流るなり何れも自然と真直
の木より花を生じたる風情に流るなり要し

車留花生る事

一 此の切花は、生花の如く、花を摘み取り、花の
由、一輪の花を花瓶の外、花瓶をなす
切の、柳の類を摘み、生花の如く、切の口へ
活き花に丸、輪の花を挿し、花の如く、
活き花の要なり、花を挿し、切の口へ
自然と活き花の如く、花を挿し、花の如く、
車僧と名附たる、昔車に乗って、世を行

廻りける、
有りとも、且、後車僧の花は、生花の如く、
を活みけるよし、其の如く、

活世の、何れか、生花の如く、

ま、輪の由り、生花の如く、
と活みけるよし、活世の活き花を、
何れか、生花の如く、

車道に人ぞ其の如く

清世にあらば其の如く

此の世にあらば其の如く

と後世にあらば其の如く

の世にあらば其の如く

後世にあらば其の如く

少科の山中に移り深山に雲霧の如く

儼然
アキハル子

人なりし世の如く

打き出さるる世の如く

と世の如く

是の世の如く

福道の如く

好むに如く

○是を如く

輪ハランごく成カタド後カドと云ふそを裏の輪カドに
 丸く穴を穿てて水を流し出す所の輪カドの
 毛をとりよを流し出すは輪カドを後カドに
 之を輪の内外に穿てて板の上の穴に花
 を穿てて法ハフがなれども申付の花ハナは
 上下の花を流し上下の穴を花のめがけ
 流し出す行カシ要エウと云ふ事なり

花ハナに葉ハエは流ハル方の事コト

一 花ハナは夏ナツ物モノも冬フユ山ヤマ殿ノ好ヨシまして花ハナの
 ものちり葉ハエ竹タケも葉ハエ板イタのよりに衝ツキ立タテを搦ヒ其
 裏ウラの方カタ、花ハナよく針ハリをうち一文字の花ハナ流ハルを
 かけと成ナリようん扱ヒす様ように花ハナをこ輪カドの
 中ナカに流ハルすなり流ハル方カタに木キのよもも能ス
 枝エダは花ハナの成ナリ方カタよく流ハルす花ハナの竹タケの本ホに

さうもさうも程の指生 流るるあり
亦纏枝牡丹鉄緑の車 鉄緑の車 鉄緑を流
けに流るる纏枝牡丹鉄緑の車 鉄緑を流
るるあり

正附花生のり

一 是亦慈照院殿の好ま書院床の
一面、知母生母のり、流るるあり

是亦物なり下も二書院のり二書院の水の
り流るるあり、花を流るるあり、流るるあり
下もたなくと次節に流るるあり、花を流るるあり
上も流るるあり、上下共に二書院の水を流るるあり
溜のり故之段のり、流るるあり、流るるあり、
流るるあり、流るるあり、流るるあり、流るるあり、
り行ふあり

三草切に生花生（さか）

一三草切に生花生（さか）と記す

二三草切に生花生（さか）と記す

三三草切に生花生（さか）と記す

四三草切に生花生（さか）と記す

五三草切に生花生（さか）と記す

六三草切に生花生（さか）と記す

七三草切に生花生（さか）と記す

八三草切に生花生（さか）と記す

九三草切に生花生（さか）と記す

十三草切に生花生（さか）と記す

十一三草切に生花生（さか）と記す

十二三草切に生花生（さか）と記す

十三三草切に生花生（さか）と記す

十四三草切に生花生（さか）と記す

十五三草切に生花生（さか）と記す

花活方に直らざるは

順に辨知す

花活方に直らざるは

順に辨知す

三草切に生花生（さか）と記す

四草切に生花生（さか）と記す

五草切に生花生（さか）と記す

六草切に生花生（さか）と記す

七草切に生花生（さか）と記す

八草切に生花生（さか）と記す

九草切に生花生（さか）と記す

十草切に生花生（さか）と記す

十一草切に生花生（さか）と記す

十二草切に生花生（さか）と記す

十三草切に生花生（さか）と記す

十四草切に生花生（さか）と記す

一 直火の花は三種（花より）行の花は三種
花より草の花は二種（花より）併花考シヨウ記キ
こより一概カク二種（草）ならんは之何より
祝言の花は三種（花より）なり三種
真花マナハナ花方ハナカタ用ヨウる事コトなり

花法の釘お所寸法ハナホウノクワシ

一 大法オホホウ床トコ思オモ定ヨシより曲カマ人ヒトここ年トシより寸サツ法ホウはハ好コトウ好コトウ

是コトをシくハしテもハらズにシテハもハらズとシテ
通ツりのユとハるハ然シるハもハらズなり

定サ山ヤマ撥ハクし事コト (垂)

一 女メ山ヤマ撥ハクは物モノ好コトウまま好コトウまりまり物モノ或シ時トキ床トコ服フクの櫃
花ハナ法ホウの釘何ナニ所トコロ、女メ高タカ理リ比ヒ色シキを並
かれたりたり是コトを見玉タマの物好コトウたまよよしし花ハナ色シキ
を倒たりたり形カタチなりなり床トコの真中ナカよりハ三サン寸サツ

かけず附書る院とふ坊所をたけ下へ釘
をお打^{ウチ}込^コ撲^{ツキ}を懸^ケり花を流^ナるやいすは
だれ屏^{マシ}風のたぐひへも打^{ウチ}削^ケる懸^ケ花
を流^ナる事なり

杜名流^ナるの事

一 杜^{カキツバナ}名^ナの杜^{カキツバナ}昔^{カキツバナ}花^{ハナ}と書^{カキツバナ}けり又一^{カキツバナ}名^ナ燕^{カキツバナ}花^{ハナ}と
ふ^{カキツバナ}節^{カキツバナ}の^{カキツバナ}梅^{カキツバナ}子^{カキツバナ}の^{カキツバナ}花^{ハナ}の^{カキツバナ}流^ナる^{カキツバナ}方^{カキツバナ}別^{カキツバナ}の^{カキツバナ}事^{カキツバナ}

随^{カキツバナ}分^{カキツバナ}之^{カキツバナ}月^{カキツバナ}の中^{カキツバナ}に^{カキツバナ}身^{カキツバナ}を^{カキツバナ}サ^{カキツバナ}一^{カキツバナ}形^{カキツバナ}の^{カキツバナ}水^{カキツバナ}物^{カキツバナ}
う^{カキツバナ}て^{カキツバナ}る^{カキツバナ}は^{カキツバナ}水^{カキツバナ}中^{カキツバナ}に^{カキツバナ}身^{カキツバナ}を^{カキツバナ}サ^{カキツバナ}一^{カキツバナ}形^{カキツバナ}の^{カキツバナ}水^{カキツバナ}を^{カキツバナ}費^{カキツバナ}は^{カキツバナ}し
凡^{カキツバナ}物^{カキツバナ}に^{カキツバナ}は^{カキツバナ}流^ナる^{カキツバナ}事^{カキツバナ}なり^{カキツバナ}當^{カキツバナ}人^{カキツバナ}目^{カキツバナ}に^{カキツバナ}杜^{カキツバナ}名^{カキツバナ}の^{カキツバナ}後^{カキツバナ}に^{カキツバナ}
乃^{カキツバナ}は^{カキツバナ}葉^{カキツバナ}と^{カキツバナ}て^{カキツバナ}花^{カキツバナ}を^{カキツバナ}流^ナる^{カキツバナ}事^{カキツバナ}なり^{カキツバナ}一^{カキツバナ}形^{カキツバナ}の^{カキツバナ}水^{カキツバナ}物^{カキツバナ}
と^{カキツバナ}て^{カキツバナ}る^{カキツバナ}事^{カキツバナ}なり^{カキツバナ}一^{カキツバナ}形^{カキツバナ}の^{カキツバナ}水^{カキツバナ}物^{カキツバナ}
前^{カキツバナ}の^{カキツバナ}葉^{カキツバナ}と^{カキツバナ}て^{カキツバナ}長^{カキツバナ}枝^{カキツバナ}に^{カキツバナ}成^{カキツバナ}る^{カキツバナ}事^{カキツバナ}を^{カキツバナ}流^ナる^{カキツバナ}事^{カキツバナ}
も^{カキツバナ}あり^{カキツバナ}大^{カキツバナ}作^{カキツバナ}の^{カキツバナ}杜^{カキツバナ}名^{カキツバナ}の中^{カキツバナ}に^{カキツバナ}は^{カキツバナ}一^{カキツバナ}也^{カキツバナ}一^{カキツバナ}也^{カキツバナ}

二枚葉の葉と九枚葉とをいふは
 旬に杜若の開葉をいふ中一葉若葉と
 葉千枚葉とあり其節は大流されハ夫
 一葉若葉に在り年去十一年とありは
 葉若葉をいふは子候に在り花若葉をい
 四月五月之頃までの杜若の葉の若
 たりハ六年通りの葉をいふべし

五月下旬より六月の杜若の葉をい
 葉より若くは其下の花の葉より低く
 一葉七八九月の杜若の葉の由々
 葉の若くは流し其下の葉の対候と考
 一葉の若くは二葉の葉をいふ根えの縁に
 分りたるをいふは去河内の歌に
 杜若の葉の生きたるらん
 何をいふたつる心なるらん

此流^{シユウ}を能^カく辨^カへ大生^{ダイセイ}の^ハ高^{カウ}生^{セイ}を平
目^メに^ニ多^タく向^{ムク}ふ^ル前^{マヘ}に^ニ角^{カク}を折^セ首^{ウヅ}たる^ト様^{サマ}なり
可^カひ^ニら^ニし^テ流^{リウ}る^ル事^{コト}又^{マタ}源^{ゲン}仲^{チュウ}の^ノ流^{リウ}
正^{テイ}花^カの^ノ自^ジは^ハぬ^ハぬ^ハり^ハは^ハす^ハの^ノ

いとむじらとなむは^{カキツク}花^{ハナ}の^ノち^チ

と有^アる^ル流^{リウ}を^カ能^カく^カ何^{ナニ}れ^レハ^ハ大^{ダイ}生^{セイ}の^ノ口^コ口^コの^ノ流^{リウ}
形^{カタチ}一^{イツ}村^{ムラ}と^ト根^ネの^ノ縁^{ヘリ}を^カき^キら^ラ流^{リウ}る^ル事^{コト}

能^カく^カ両^{リウ}首^{ウヅ}の^ノ流^{リウ}を^カ考^{カウ}へ^レ流^{リウ}る^ル事^{コト}

薄^{ウス}花^{ハナ}活^{カク}方^{カタ}の^ノ事^{コト}

一^{イツ}母^ボの^ノ花^{ハナ}に^ニ生^{セイ}花^{ハナ}は^ハお^オ種^{タネ}の^ノ信^{シン}授^{ジュ}の^ノ由^ユを^カく^カ
ケ^ケま^マの^ノ事^{コト}に^ニ流^{リウ}る^ル事^{コト}を^カく^カ授^{ジュ}の^ノ
極^{キョク}意^イと^トす^ス流^{リウ}る^ル事^{コト}に^ニ池^{イケ}中^{チュウ}泥^{ドロ}の^ノ由^ユを^カく^カ授^{ジュ}の^ノ
旬^{ジュン}に^ニ花^{ハナ}の^ノつ^ツげ^ゲを^カく^カ授^{ジュ}の^ノ由^ユを^カく^カ授^{ジュ}の^ノ
賞^{ショウ}院^{エン}に^ニ流^{リウ}る^ル事^{コト}を^カく^カ授^{ジュ}の^ノ由^ユを^カく^カ授^{ジュ}の^ノ
誠^{マコト}其^{ソノ}形^{カタチ}花^{ハナ}作^{サク}の^ノ

何れに柳活方、女意としかぬるよし、
時を葉三葉、蒼葉、水の内より十寸のあたりに
五寸通りし出、活方、五月中旬、雨が早く
生立場所の薄に葉花昔、採りよのち、六月
中旬までの間に、大体、雨の活方、
先、真夏の活方、有、夏の活方を、
より、真夏の破葉、
附根

より、二寸八分、
葉一本、陽を、
葉とす、
とす、
活方、
の、
今、

其の時候をわき見五月中旬なるといふ
五六月心算五月下旬なるといふは七八歩
首の旬に五りなば高さ八九歩とある
六月中旬後九歩十分にして流るる
尤六月有る年之用のまよき時に極ふる
可く之は秋のさきいふてい草(カス)直(ウチ)をま
まひ葉より花をけして流るる花のふ所
に

草(イ)葉(イ)より二六三六と下ける斗は(イ)生(イ)り
草(イ)葉(イ)をまよき時にけられ葉のふ所
にまよして(イ)かた(イ)は(イ)ま(イ)り(イ)と(イ)は(イ)な(イ)り
と(イ)は(イ)生(イ)る(イ)時(イ)に(イ)ま(イ)よ(イ)き(イ)時(イ)に(イ)用(イ)ひ(イ)ざ(イ)れ(イ)ば
五六月の(イ)ま(イ)よ(イ)き(イ)に(イ)流(イ)る(イ)ま(イ)よ(イ)き(イ)と(イ)は(イ)は(イ)圓(イ)葉(イ)の(イ)葉(イ)
けり(イ)を(イ)花(イ)の(イ)葉(イ)の(イ)ま(イ)よ(イ)き(イ)に(イ)あ(イ)り(イ)て(イ)根(イ)元(イ)水(イ)際(イ)
に(イ)ま(イ)よ(イ)か(イ)し(イ)ま(イ)よ(イ)き(イ)事(イ)を(イ)細(イ)に(イ)ま(イ)よ(イ)き(イ)時(イ)に(イ)

大伴仲の形なり花を中葉に中葉を葉はかり
 枝をよりより廣に馬鬣の款、活る時を行
 草の活方其の活方を略したるものゆゑ
 其花葉の振りに依て五つの役を三つとせり
 我々の活方と心なたる一、早咲の連を
 活る心持活る中葉とて、潔くたるもの故
 中葉を中葉の活るの、俊頼の款、

玉を葉の葉をよむるに

いほせや花のまをよむるに
 と有るを能く辨へ生るるにす、有り
 むらひ、葉の活方其の自然と備り、様、
 活るの、中葉及大葉の、親類の款、
 葉の好なる活の花を、葉の、心よむる、
 活るといふ、活るといふ、活るといふ、
 活るといふ、活るといふ、活るといふ、
 活るといふ、活るといふ、活るといふ、

此二種の証款を能く辨へたる事最中
の時候より浮葉大なるもの由る平物とし
てのらひの形は浮葉をとりてし

藤本盧法方の事

一 藤本盧法方の事
の事より實をとりて法をいへし水物と爲
平物法よりなりて木木の根の事

事阿の事の隨分根の事なりて實
と明かにせん事ものなりて法は授の事
一 先一種法は定むる事ありて
と定むるもの由る根の事なり
大伴瓢の事なりて法の事をいへし
阿の事なりて略す

昔自海法方の事

一 花の下の草葉は、随分水中、深く花
体は流さずして葉の葉より花の葉の
中をよそを花より後、の葉は二枚あるに
は葉の下の葉に附けよそありよそあるの草
葉、草より例の草葉花と田舎るものなり
是昔草葉は随分葉を直して花は何程も
位の取方をして三枚も五枚も流さぬくむそなり

葉も低く生る事なれども其形の横
様よりよそ葉の形はゆるゆるなる
ことなり

一 蕙花子の流方の事

一 蕙花子は大花二枚に葉五枚三枚あり
七枚階を低く流ることをも葉の由二枚
ハ此で流る時、葉の取方ありてよそなり

こ愛の葉一枚をまきしは信し

川骨流方の事

一川骨の文の訓センコウと云故世俗
に花と云るを花に申せざる流儀は
たんぞ常の事と云はるは
故且つ竹皮をわすれ
まはる事

事なり大伴の事一葉を
五枚と心得たるが如く
葉の葉一枚を葉一枚と云生初
中後とも葉より花を以て流る事
とす下葉より葉より花より長
る事と云るは川の事杜の事
じ水の中より十のたからに
出る

事なりそ其随分止たる花をそも尺
を越えざる構よのあふこより蒲ガマ草ノ
の類、根の生るる河れとも是の
種の流方をよとす

鳥アツキ扇流方ノ事

一 此抄少ずい三本か五本流るる一尤も一也
葉七枚五枚三枚と付生る三本流る時都合

十五枚有る様一と流る五本の時一枚
拾一枚有る葉を吹流方葉を平白めて
葉より河れスガ能ナカ遠ナカと葉をくく様流
ル事行あなり

葉流流ノ流方ノ事

一 葉流流ハ二本も三本も五本の葉
二本より三本様心得る葉あはれ葉と

葉の背より切様をまじりて一色に大
生シヤの切キ葉を夜ヨをシヤるルあまのクキ豊トを
ならはざる様心は活きなり

葉の園法方なり

一葉ものも葉の園法方なりあり随
分根ののちを好く一葉の根木シモあり様
こま根葉ウラとよき好コりて数シヤはシヤり

去りてまじりて陰陽の葉を扱シヤりて
根の少し長短を以て流し文の心の有る
二枚まじりて余の取シヤりて廣口の
まじりて葉をまじりて一本おとす
事なり馬鬣シヤ寺の水中より葉シヤ
をまじりて八九枚の中へ有る様を念
す水際よりまじりて底へまじりて

河見書：この河坂より日影と生生の縁エ
を切るやたれおまほ枝なる葉を河見とよ
夏つれとも細い仲のゆく流る時、枝葉の河見
しよ好るよし一色流る時、九月より
まのよちよに二枚のしよよし、葉蘭の
花九十月土中より咲くよあり花の咲く
すから、枝葉の河見しよよし土中に陽気

保クキつり故枝葉の河見しよよしあまりす

九輪ま流るの事

一、そのま物の花なり大伴佐好よりしよら
だるものあり葉のままなるしよら左ねたる
ゆゑ長短を振りまは、花一本に限る葉
五枚まましよら

栲流るの事

一 構の紅白シヤウシヤウが其の法なる所ノコトスより少す
 永捨る夏より紅紅とサ一ロ切惣カ志カ蒼白
 ぼろを角マより大伴オホトモ并ナ一輪ヒツ蒼アヲ二輪ニと
 四の葉數ヨ之段の位イをれ上ウの枝エ、葉數ハを丁チヨウ
 中枝ナカエ、葉數ハを下シ下の枝シ、葉數ハを丁チヨウとの魚
 其葉の四ヨ之中チ下の位イを其カ内ウチより陰陽インヤウの
 葉として向ムカひおオつたる葉ハをシ生ナせ又マタひヒく

是コトに美ミ熟ジュクり一葉イツハをりシそとトお除オシの葉
 とを構カマの法ホウ方に用ヨウめるル得エるル故ユにその体テの
 葉ハを無ムし時トキに葉ハの沈シヅまるル体テの枝エを削キ
 きテ花ハをオホ復ホふ形カタをシ何ナニもモしテ添ソへテ
 之コトにシ葉ハをシよク行ユクはナらズ

一 葉ハの漢カン法ホウ方ホウ此コト事コト

一 葉ハの蘭ラン漢カン名メイ白ハク及キとシよク三サン角カクよりシ

中を花ツボ袋を着る開く時直ぐ袋を返して送
つれば袋の裏を花を流る葉が後。山枝
前を枝を二枚。さし中を六葉が一枚
さしよのまゝ。黄唐蘭。随分葉がまじり花
をかく入る。二様。さし葉より花を低く
流る。さし唐蘭。花の幹ツボを根のま
の根より別ツボこきせし流る。さし叶ツボあり

花ツボ草蒲ツボ法方の事

一花草蒲ツボと草蒲ツボと似て莖短し法方大伴
五本七本位流る。さし葉がまじり
花の開きとさし葉が低く。花の幹ツボを返して
流る。尤も葉の低く。さし葉より花の幹ツボ
を返出ツボよ。さし葉が故法方の事なる。さし

杜衡法方の事

一社衛の地は花の尺を止む一葉の花の軸を
見せざる様々立ちたる葉を二三枚を以て其全
いふ出れたる葉をまじり葉の多きを以て
見にくまぬのなり

七鳥尾活方ノ事

一七鳥尾の胡蝶花と書けり二三月の頃花咲く
ものあり葉の裏表を行衣行の如く活方ハ

是をまじりて後に葉の枝前葉の枝
花の枝ならば葉の枝活方なり
傳へるものあれども多く根のまじり
るなり

牡丹活方の事

一牡丹の古き木の端に芽を結び一莖の花を
開くものにて一莖の枝あり依て一輪生ず

限^ミ一輪の花も葉三枚花と葉も位
 を記さずえむむう花と生らるるし大仲ハ
 坐物と心わべ一^カ花^カ程^カ葉^カ三^カ莖^カ
 三輪も活き^カの^カ開花二輪^カ生^カら^カる^カと^カ花^カ
 て然^カと一^カの^カの^カの^カど^カや^カか^カに^カ花^カの^カ着^カ
 く様^カ活^カき^カの^カあ^カなり^カ一^カ体^カ水^カ物^カなど^カに^カ
 て^カ一^カ題^カ仲^カの^カ歌^カ

深草
 牡丹

深草も容へに候ける深草深草水^カ然^カ
 は証^カ歌^カを^カよ^カり^カ辨^カ水^カ物^カに^カ活^カき^カなら^カハ^カ花^カ容^カ
 自然と水移り^カ形^カなり^カます^カ

水仙花活方の事

一水仙異なる花も莖一本に葉七枚生^カたる
 物故大^カ体^カ莖^カ三^カ本^カに^カ葉^カ八^カ枚^カ有^カる^カ去^カ八^カ枚^カの
 葉の^カ葉^カと^カ葉^カの^カ引^カ添^カたる^カ有^カる^カを^カ採^カ葉^カ

用ひ多しなり先づ圓筒生花生細口の付きた
表取寸切草の花生より二枚をとりしとを
横はより五枚七枚一伍ありて一其外一色
大入より二十三十にては活ききし尤株を
分ち二口三口よも活ききし有り乍去莖一
枚二葉を枝の水化の法ゆへ控申なれば
華甲一枚有り且つ圓も活ききし一枚せども

葉數二十枚と見ゆるなり其等二具
振合次第ありて水仙の古例の花
活きの活ききしとて用振を

檀特活方の事

檀特二枚三枚程活るものあり二枚とれば
此今葉れ五枚のころ三枚の時に葉れ七枚
又九枚迄の花の活きたる葉を正面陽に

うけて流るるを其外、葉の根に
る様、流るるを

芙蓉生方之事

一芙蓉の花の美色たるものも聖人
愛せられたる花として尊貴の一種なり
決して流るる根は流るるもの
一色たる一位置たるもの行ある

芙蓉の時に花が繁きもの故位取り
か、同様に花葉の生れを位
をある

蒲公英流方の子

一蒲公英一名鼓草と云ふは月下旬
より三月上旬までの花なり流方丸輪
これとく葉の根に一枚あり一枚あり

長短をとり花二枚一丈二枚なり誠の
草花田子の子にて茎短きものより廣
口^{ウス}なげとに法るものあり

砂物活方の事

一 沙物の立花生花の中央より注^{オウコ}た東山敷
は好し松の枝をきくらせ玉の床よ生
玉ひより生花始まなり其後能阿弥

の工夫^{コウブ}を銀^{ギン}の^コきよの西南^{シナン}より衣^{キヌ}懸^ケ
山^{ヤマ}の木振^{キマ}よき松一本^{イツポン}河^カの^コが^ガ物^{モノ}の色^{イロ}
葉^{エハ}をくみ^{クミ}新^{ニホ}くは^ハ松^{マツ}棲^スけり^{ケリ}物^{モノ}温^{ユク}
る^ル陽^{ヨウ}物^{モノ}として^{シテ}白^{シロ}き^キ葉^{エハ}を^ヲ生^ナらす
を^ヲ本^{ホン}か^カれ^レ其^{ソノ}木^キ枯^カると^シ沖^{ナカ}の^ミ風^{カゼ}の^チ糸^{イト}の^ノ
妨^{サマシ}を^レ大^{ダイ}木^キな^らば^ハあ^らば^ハい^はは^はは^はは^は
能^ネ阿^ア弥^ミ下^ゲ知^チ玉^{タマ}ひ^ヒを^ヲ切^キら^せ玉^{タマ}ひ^ヒに

然も振よき松の惜こみの故能阿蘇を捨サシ
 圖ヅし園中の池中へ浮石の間にはの松をつ
 きたておきけるに其振よきの以もあつた
 自然と石を扱サひ流石サスガを生ガたるものと
 せん水中泥土、本口をいしまや、久美
 みを越ゆれとも其松青々とて平常に
 青山は眺めとていふはむとかな其因能阿
 下上

の工夫を大なる石鉢或は壺瓶の類へ
 池本を切指生ずる成りぬ之花家其遠り
 容易ヨウイに植ウちたりありがくまのあれど石物の
 多たふそ研物の濫觴ランサウあり故に石を以
 て根を留コウす本花とにばまきしサハ大本
 こそ石を以て留コウす池の坊の之花仲も
 其の花を略サたる研物あり且ハ花瓶

本草を以て夫の花をさきを交す。れは小苗
 流其源を尋ねるに石を留るるあり
 大伴本物三種草木之種或は木花をさき
 三種位も活き多しとて成るく本物有んざる
 時に枯木に松の類の松を振りぬく釘を
 打付て用ひ根の花草ともにも生るは儀も
 生花を用多しとて書院饒り昔の常の

生花をさきに木の大小に依り初心にえゆるもの
 打れ、研物を活き多しと大伴正心副心長枝
 ひ之を交はぬのこを欠くものなり其外
 永有活き多し

車に留るの事

一花を活るに車を用ひて其の生をさき
 唐七年中之薩州征伐の時軍中に種

袁紹は樹膠ウツを嗜みよるぬれ木のれくの癖ナクサミに茶を
生花をまじひマキびテキヤツ習ナびシあやシげし軍戦イソウの中
に孝陣タイの時雪をあげ雨を凌ぐの如く極
隨イソウ古代も軍中にて格興キヨウありしなりとあ
ん薩州征討陣代に對し馬の裾スワ盟ムラヒの氷
を張の轡ウを坐して山中の本花を平花を
元活たるものより薩州を打たる轡ウ他の

轡ウはなり丈夫より花配グにまろい居ク強キヨウあり
當時のより花は花轡ウを別ワれ打ウつる如く
松は薩州轡ウを日影ヒカゲをも照方チヨウの言鉄
の轡ウを括ク上下ウのよるよる兼ケン新シン程ケイの坪ツツを三鏡
鉄テツの十字ジュウジ成ナるナ花ハナをキし又マタの言鉄テツを以て
十字ジュウジのスナカキ所トコロ遠トウくトクまマせ花ハナを以モつるものなり
何ナニよりたる方カタをれし轡ウは必カナラしを以モつる

事をいふ法と云ふ

解^{カニ}留^トノ法云々

一解留^{カニト}ノ法云々は古の最初より用ひたる之
并^{ハジメ}端^{ガモト}之^ハ浦^{ウラ}生^{ナマ}民^{タタ}郷^{サト}佛^{ブツ}像^{ゾウ}を穿^{ウカ}鑄^{カネ}を鑄^クさ
昔^{イマ}時^{トキ}種^{タネ}生^{ナマ}類^{ルイ}の形^{カタ}を鑄^クてさせ配^{ツク}びり
せし亦^{モト}や宗^{ソウ}易^イか信^{シン}授^{ジュ}を授^{ジュ}けそそ奉^{ホウ}ずり
名^ナ號^{ゴウ}有^{アル}人^{ヒト}故^{コト}風^{フウ}流^{リウ}こそそももひ^{オキ}玉^{タマ}物^{モノ}探^{サグ}

こ始^{ハジ}用^{ヨウ}ひしころも有^{アル}し且^カ後^{ノチ}平^{ヘイ}
物^{モノ}を花^{ハナ}法^{ホウ}多^タ時^{トキ}解^{カニ}留^トを用^{ヨウ}ひけりし孫^{ソノ}
村^{ムラ}山^{ヤマ}軒^{ケン}の邊^{ヘリ}より流^{ナガ}る^ルまひ^{マヒ}名^ナを吹^{フク}味^ミ有^{アル}
と^ト流^{ナガ}あり乍^ハ去^サそ^ソ風^{フウ}流^{リウ}のそ^ソ中^{ナカ}花^{ハナ}
交^{マシ}融^{ユウ}所^{ショ}を^ヲ生^{ナマ}て^テ然^シ大^{ダイ}作^{サク}生^{ナマ}河^カ子^コ
河^カ子^コこれ^レを^ヲ解^{カニ}留^ト陸^{リク}地^チ寄^ヨせ又^{マタ}水^{スイ}中^{チュウ}
一^{ヒト}の^ノあ^ハれ^ハ且^カ心^{シン}を^ヲさ^シむ^ム形^{カタ}

宝きたまひ入盤と云ふあ、出る形よ、
を出盤と云ふ大伴キツをまよますむ
ま細虫のまき方ハ有りそ、出ハをね合せ
行ガシまきオカあり其外ツギと云ふこの盤
を水中又其縁を引花の活言ひの枝
の下へ花器の外よりまよを向けしを
かけまきるも有り形

大盤：花留方石まよのり

一丈盤：花活まよのり
始まけりそ、表書院より異付まよ、
廊下ホ扱、まよあり平人の家まよ、
盤をまよひ花入るまよ有り、
の形を活まよのり、
の深まよ、
胸ドを

を市に置き夫より過す^ツわきを回^ル外に石
ニツ水合を^ツ咽^ヲを^ツ河中の^ツ持^ルとして水物を^ツほ
二に三に^ツ流^ルる^ツに本物を^ツ舟^ニの^ツ人も
有^ルもの^ツを^ツ流^ルる^ツ時^ツ根^ノの^ツ舟^ノ物を^ツ江^ノ山^ノ又^ツ
石の^ツ生^ルる^ツの^ツ邊^ノの^ツ様^ノつた^ツも^ツの^ツ生^ルる^ツは
大^ノ体^ノ荷^ノ山^ノの^ツある^ツもの^ツも^ツ方^ノ十^ノ倍^ノの^ツもの^ツ
を^ツ市^ノの^ツ邊^ノの^ツ時^ツに^ツ持^ルる^ツは^ツ口^ノに^ツ流^ルる^ツもの^ツ

度々^ツの^ツ数を^ツ又^ツ工^ノ夫^ノを^ツた^ツの^ツ然^ノと^ツる^ツ方^ノ出^ル
る^ツもの^ツ水^ノ面^ノより^ツ石^ノの^ツ面^ノを^ツ生^ルる^ツの^ツ胸^ノ石^ノは^ツあり^ツ
小^ノ石^ノニ^ツは^ツ石^ノと^ツつ^ツた^ツま^ツし^ツる^ツ邊^ノ石^ノを^ツ放^ル
沈^ルの^ツ生^ルる^ツ其^ノの^ツ幸^ノの^ツ根^ノの^ツも^ツの^ツも^ツ若

花水上^ノ様^ノの^ツ事

一^ハ花^ノの^ツ様^ノ切^レた^ツる^ツ自^ノ其^ノ流^ルる^ツ時^ツの^ツ勢^ノの^ツ口^ノを^ツ
穿^ル切^レ捨^テ水^ノの^ツひ^ツ其^ノ水^ノ気^ノ有^ル内^ノより^ツ濁^ル

切ふ口をつけ生きた時斗にせし頃永く洗る
時随分花持ちよきものあり

一白^{シロキ}梅^{フダ}切れぬ時^{アタ}お^カ日^ヒつ^ヒは^ハ多^タ梅^{ウメ}田^タあり

して餅^{モチ}米^{コメ}を^ス搦^ス濁^スろ^スけ^ス且^ツ濁^スつ^ツけ^ス生^ナ羽^ハ音^ネ

洗^スろ^ス其^ノ夕^{ユフ}よりつけ生きた洗^スち^シ菊^{キク}の

の事^{コト}あらば時^{トキ}そ^ノつけ生^ナて洗^スろ^ス

なり大^{オホ}作^{サシ}一^{ヒト}生^ナ夜^ヨ花^{ハナ}持^{モチ}よ^キものあり

一日^{イツニチ}車^{クルマ}の^ノ中^{ナカ}り^ニ切^キらせ^テ洗^スろ^ス其^ノ本^{ホン}に^ニ切^キ捨^スて
冷水^{レイスイ}の^ノ傍^{ナカ}り^ニひ^ヒく^ク生^ナき^キそれ^レより^{ヨリ}洗^スろ^ス
ことあり

一^{ハギ}秋^{アキ}の^ノ蒸^シ工^コを^スき^キり^テ水^{ミヅ}を^ス洗^スひ^ヒ山^{ヤマ}

樹^{ツキ}を^ス搦^スり^テ水^{ミヅ}に^ニ洗^スれ^レよく^ク音^ネえ^ル水^{ミヅ}移^{ウツ}り^シ

時^{トキ}秋^{アキ}の^ノ生^ナま^マを^スま^マり^テ生^ナき^キ且^ツ山^{ヤマ}樹^{ツキ}の^ノ水^{ミヅ}

を^ス洗^スて^テ逆^{サカ}水^{ミヅ}を^ス打^ウち^テ暫^シく^ク洗^スろ^ス

一 付皮一名剪夏種と書けりその節を
 割り水に入置きおし流し洗ふ事あり
 一 秋海棠シキリカスの諸水につくる生きたるもの
 一 下ヶ節を割り冷水の花ぎはまで
 つけ生て斗程経て洗ふ事あり
 一 手り如く秋海棠の葉にたると
 一 葉落しおきてたるとしゆくゆれども葉

末のいとまきものまで通例にあり
 一 生きたる冷水を打てし
 一 葉の活
 一 生きたるものまで
 一 緒に根えをくり申程をむまび其
 一 所よりひれをつり根えを水に入る様
 一 井の水、釣りさげ生きたる時大伴
 一 昼夜に潤ウレホハをくほつものあり

一 川骨の逆水を打ち斬りしをあり河を所
 一 逆水夫より蒸上の水気をとぎしれり鉄将圖オハゲコロ
 水、蒸あふつけをす時斗り蒸きを流す
 一 杜衛切れて水一滴につけを流すなり
 一 すき切れて真酢へつけを其酢を
 直に逆水におて流す
 一 野果の蒸を切捨横りして水につけ

蒸きを流す

一 河おひ切れて直に節を割り是を横
 一 冷水につけを蒸き其後流す
 一 乳類切れてすつ開き煮る所の所を蒸
 ひとつは蒸栗を蒸びしを煮る女は
 かり水面に出し凍らば冷水につけを
 きす時程して流すなり 槿花も白あ

可

百々條終

源氏流瓶花規範抄

坤
終



